

負け枝を作らないブドウ平行整枝短梢せん定

～外側の枝が、負け枝になりやすい欠点を改善する樹づくりを紹介します～

近藤祐司（知多農林水産事務所農業改良普及課）

【平成28年11月7日掲載】

【要約】

ブドウにおけるWH型平行整枝短梢せん定（以下「WH型」という。）では、基部に近い主枝（内側）の勢力が強くなりやすく、先端の主枝（外側）が弱りやすい。そこで、内側的主枝を1年遅らせて配置して、外側的主枝の樹勢を強くする、外側的主枝は2年目には曲げずに1年間まっすぐ伸ばす、内側的主枝更新を早めに行う、の3つの手法を取り入れたところ、内側的主枝の樹勢が強くなるのを抑え、外側的主枝の勢力を保てることわかった。この手法は、慣行のWH型整枝よりも成木になるまでの期間を要するが、樹勢バランスのよい樹にできると考えられる。

1 はじめに

ブドウ平行整枝短梢せん定には、主枝を配置する方法で一字型、H型、WH型など様々な樹形がある。樹冠面積を小さくすると強樹勢になりやすく、結果枝の副梢発生が旺盛になり、新梢管理に時間がかかるため、愛知県では、樹冠面積を大きくしやすいWH型が一般的である。

しかしながら、慣行のWH型は、主幹に近い側（内側）の主枝が強くなりやすく、先端側（外側）の主枝が弱くなりやすい傾向が見られる（図1）。

そこで、内側的主枝が強くなりすぎないように、新たに3つの手法（ポイント1～3）を取り入れた整枝方法（以下「改良WH型」という。）を紹介する。

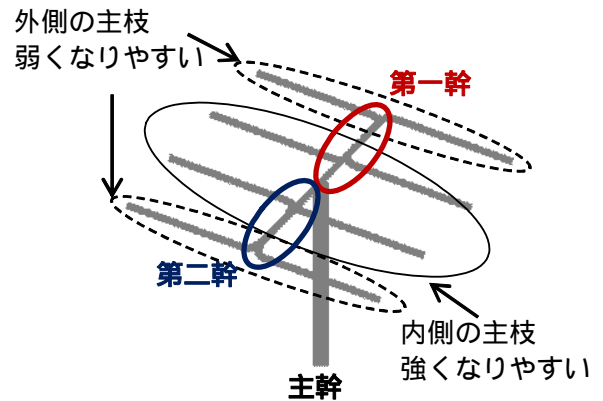


図1 WH型平行整枝短梢せん定

2 改良WH型整枝の樹形づくり

ポイント1：内側的主枝づくりは1年遅らせ、まず外側的主枝づくり

慣行のWH型では、同じ年の枝（同年枝）で主枝を形成するが、同年枝を主枝に配置すると主幹に近い内側的主枝が強くなりやすい。

そこで、同年枝を主枝にせずに、まずは外側的主枝を育成し、内側的主枝は1年あとに発生させた枝を用いることで、外側的主枝を強く保つことができる。

1年目の冬の管理

1年目に棚上に残す枝は、主枝を発生させる元となる枝（以下「第一幹」という。）1本とする（図2）。慣行のWH型では、副梢を用いたりして主幹の反対側にも枝（第二幹）を配置するが、改良WH型では1年目には行わない。

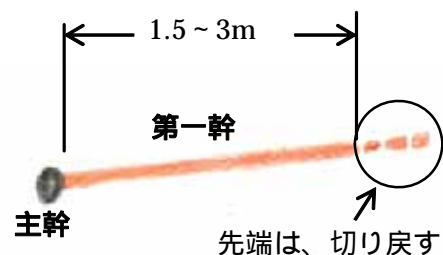


図2 1年目冬の管理（真上から見た図）

2年目の春から夏の管理

第一幹から出た結果枝を、生育が均一になるように1.3~1.5m (15節前後)で摘芯し、なるべく多く残す。第一幹の先端の結果枝は摘芯せずに伸ばす(図3)。

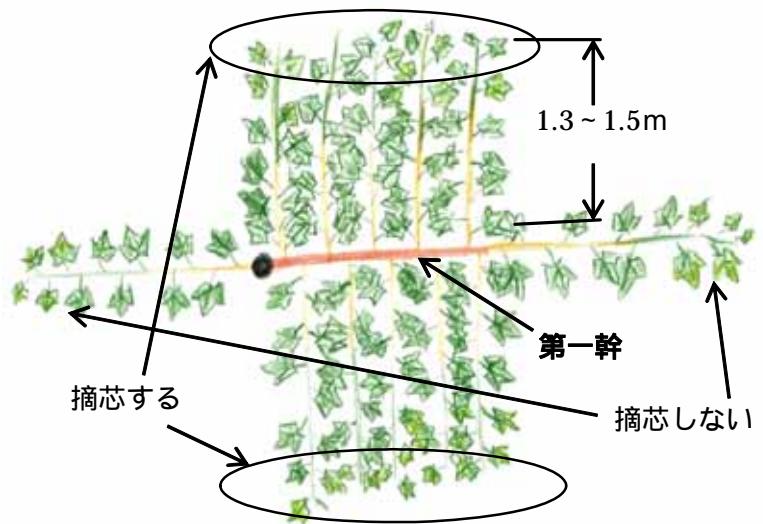


図3 2年目春から夏の管理

2年目の冬の管理

第一幹の延長枝以外の結果母枝は、芽を2つ残してせん定(短梢せん定)する(短梢せん定して残った部分を、以下「短梢せん定部」という。)。第一幹の延長枝は、2.5~3mの位置の充実した部分で切り戻す(図4)。



図4 2年目冬の管理

3年目の春から夏の管理

2年目の管理と同様に、結果枝(枝A)は生育が均一になるよう1.3~1.5m (15節前後)で摘芯し、なるべく多く残す。第一幹の先端(枝B)も2年目と同様に摘芯せずに伸ばす(図5)。

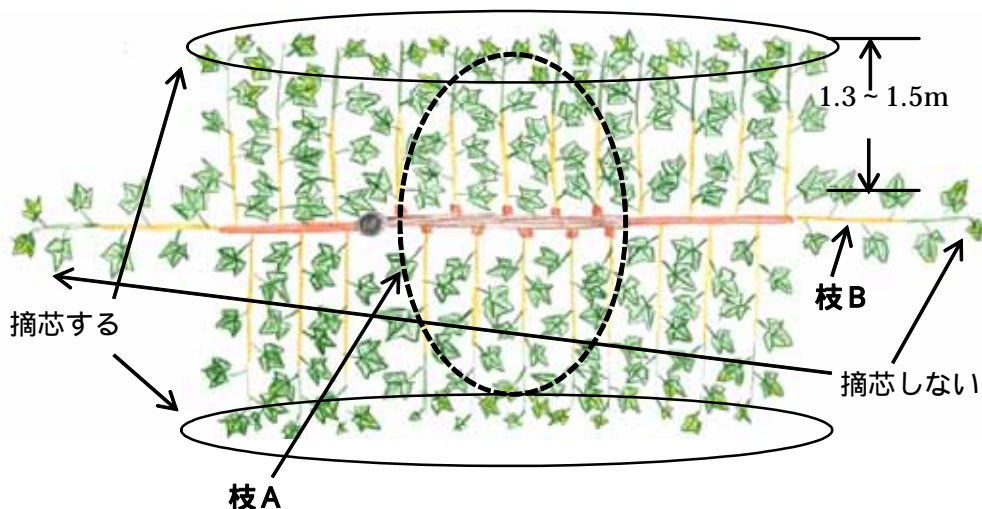


図5 3年目春から夏の管理

ポイント2：外側の主枝は2年目には曲げずに、まっすぐ育てる

慣行のWH型では、2年目の冬に主枝候補枝を主枝延長方向に曲げて栽培するが、改良WH型ではさらに1年間まっすぐ育てて（図5）、3年目の冬に主枝延長方向に曲げる。

3年目の冬の管理

図5の枝Aのうち、2本（片側1本ずつ）を内側の主枝とする。内側の主枝Aを配置する際は、外側の主枝Bより短めの1.2m（12～13節）程度の長さに切り戻す。内側の主枝Aを外側の主枝Bより長く残すと、結果枝数が多くなり、内側の主枝が強くなりやすいので留意する（図6）。

外側の主枝Bは、3年目の冬のせん定を実施後に主枝延長方向に曲げて誘引し、主枝延長枝は、1.8～2.0m（20節前後）で切り戻す。短梢せん定部が主枝延長方向に残るように曲げると、外側の勢力が強くなり内側に負けにくくなる。

また、主枝Aから来春に出る結果枝の生育の妨げとなる短梢せん定部は、切除する。

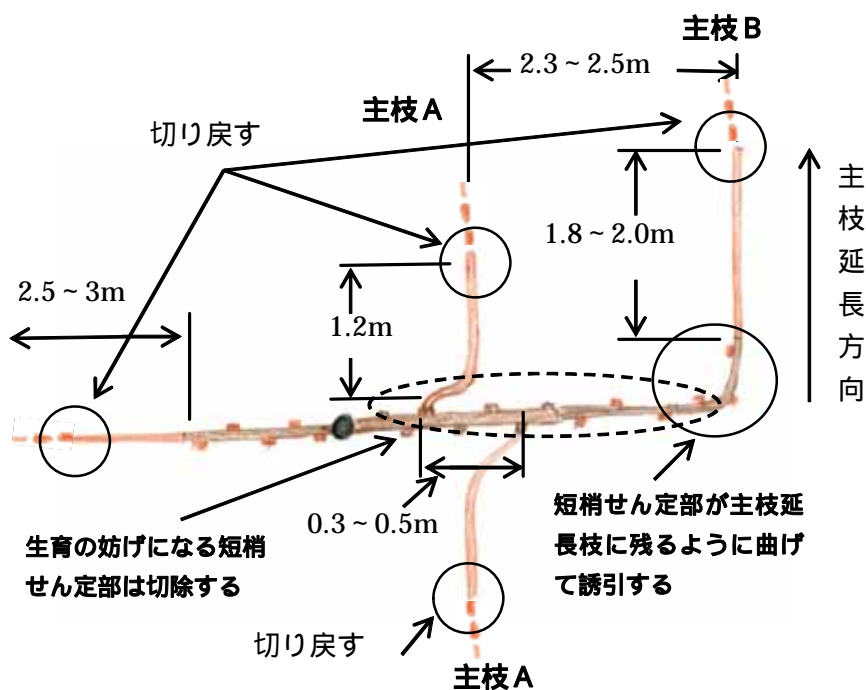


図6 3年目冬の管理

4年目の春から夏の管理

3年目の管理と同様に、結果枝は生育が均一になるよう1.3～1.5m（15節前後）で摘芯する。なお、主枝先端は摘芯せずに伸ばす。また、主枝Bの反対側の主枝候補となる、短梢せん定部から発生した結果枝（枝C）は摘芯しない（図7）。

4年目の冬の管理

外側の主枝Bの延長枝は、1.8～2.0m（20節前後）で切り戻す。内側の主枝Aの延長枝及び主枝Bの反対側に配置する主枝Cの延長枝は、1.5m（15節前後）で切り戻す（図8）。なお、主幹の反対側については、と同様に主枝D、Eを配置する。

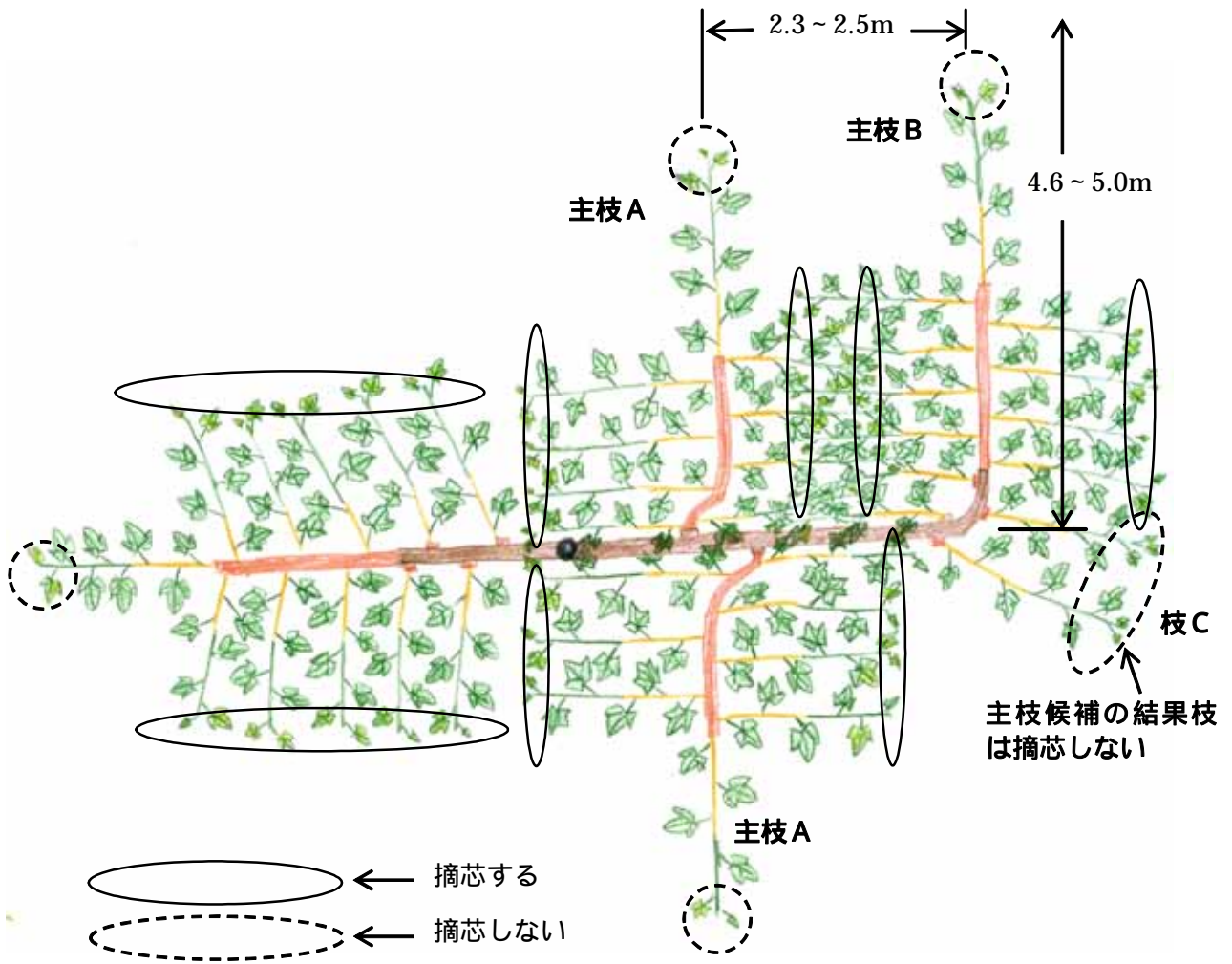


図7 4年目春から夏の管理

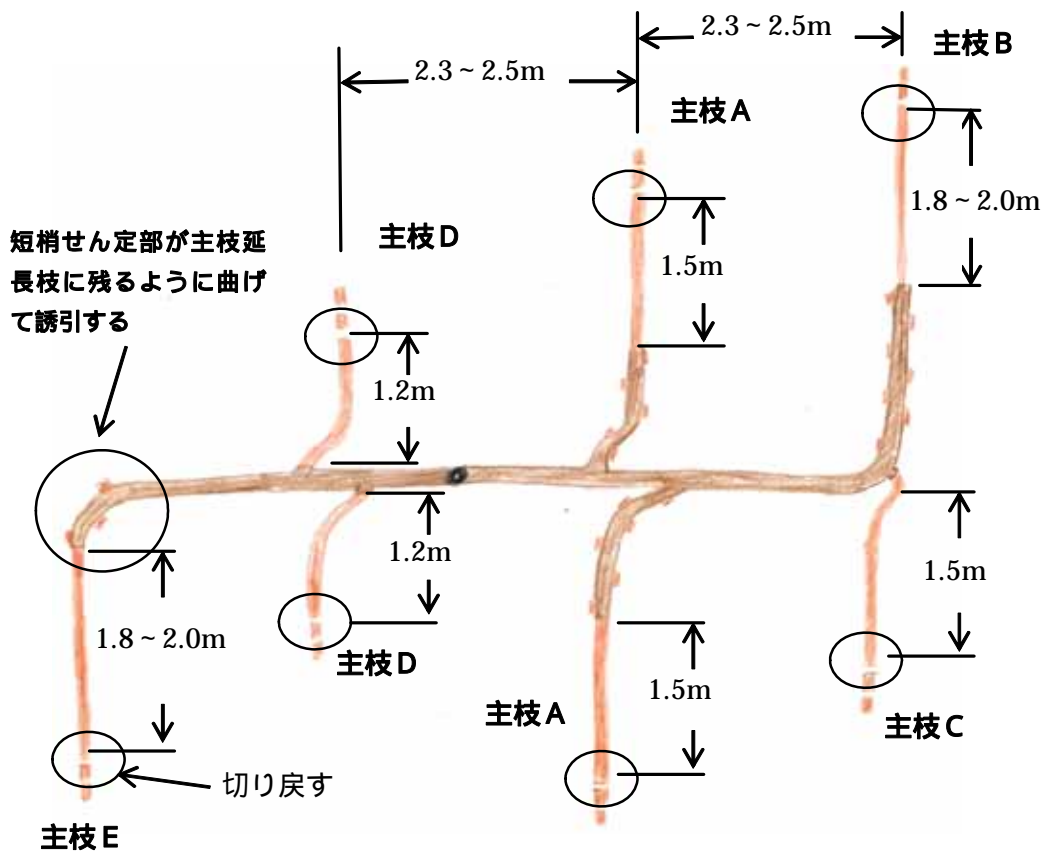


図8 4年目冬の管理

主枝Eの反対側の主枝も、同様な方法を用いて翌年以降に配置する。

なお、慣行のWH型では4年程度で最終樹形に達するが、改良WH型では、5～6年かけて主枝が4.6～5.0mに達するようにする。

ポイント3：主幹部に近い内側の主枝の更新

1年遅らせて育成した内側の主枝は、主幹に近い位置にあるので、新梢管理が不十分になると太くなり、外側の主枝が負け枝になりやすい。その対策として、内側の主枝は、基部の枝を利用して早めに更新し、内側と外側の優劣をしっかりとつける必要がある。

内側の主枝更新は、主枝が分岐する部分に近い位置にある枝を利用する（図9）。

新たな枝を主枝延長方向に誘引するときは、1.2m程度で強めに切り戻す（図10）。新しい主枝から出る結果枝の生育の妨げになるような側枝は切除し、元の主枝の樹冠面積を減らしていく。

新しい主枝が目標樹形の位置まで達したら、元の主枝を切除する。

3 最後に

負け枝を作らない改良WH型は、特別な技術を駆使したものではなく、慣行の整枝せん定技術を応用した手法である。

ポイント1～3により、外側の主枝を強く育てるとともに、太くなりやすい内側の主枝を更新する（若返らせる）ことで、外側の主枝を相対的に強く保てることがわかった。この手法を用いた整枝せん定技術は現在も実証中であり、主枝を4.6～5.0mにすると管理しやすく、樹形づくりが容易になると想定される。

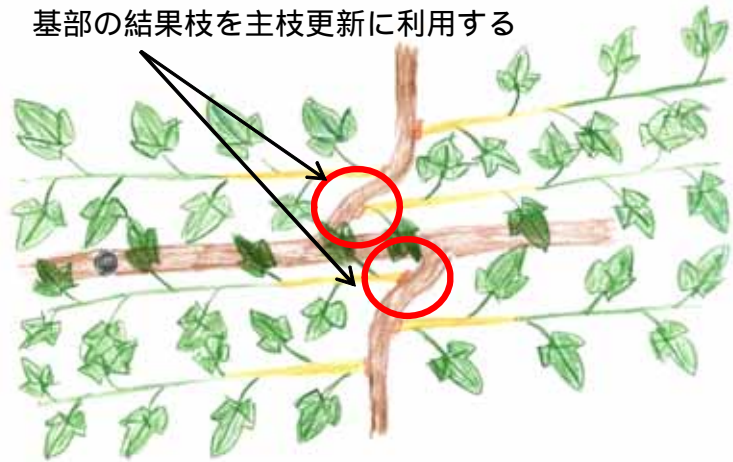


図9 基部の結果枝を利用した内側の主枝更新

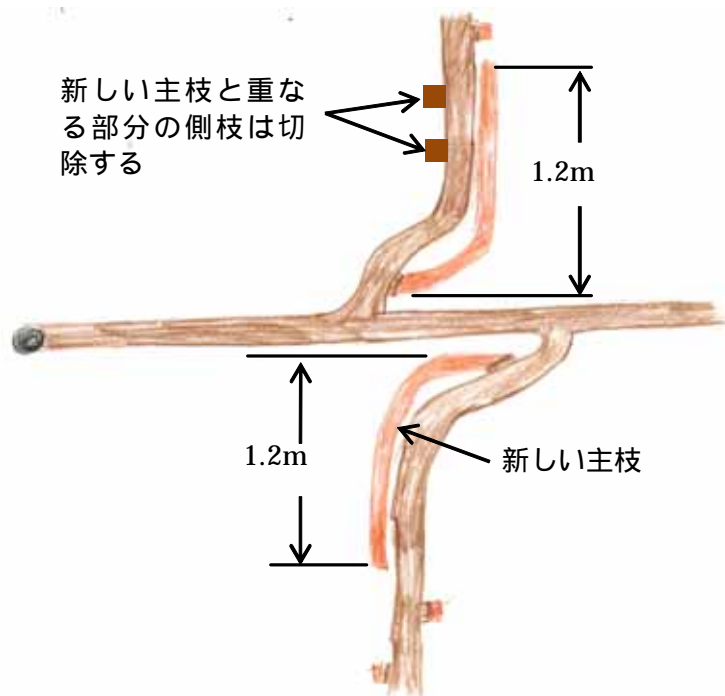


図10 主枝更新時の新しい主枝の配置図